J. Fac. Cul. Edu. Saga Univ.
Vol. 7, No. 2 (2003) 173～192

芸術家が参加する造形学習の実践的研究 I
――染色の実物作品の鑑賞授業を事例に――

伊藤　進[1)]・澤田達雄[2)]・田中嘉生[3)]・前村　晃[3)]

A Practical Research on School Art Learning with Artists I
―― A Case Study of the Appreciation of Artist's Original Dyeing Works ――

Susumu ITHO・Tatsuo SAWADA・Yoshio TANAKA・Akira MAEMURA

はじめに

わが国においても、最近では、小学校あるいは中学校に外部の人々をゲストティーチャーとして招き、授業実践に直接関与してもらうということはそれほど珍しいことではない。造形教育の場合も、有名な芸術家が母校で講演をしたり、学校行事のイベントの中で子どもたちに絵の指導をするといったことはときおり新聞等の報道で見られるところである。しかし、美術家または工芸家がわが国の小学校あるいは中学校に招かれ、通常の授業に直接関与することはきわめて稀である。

アメリカでも、芸術家を学校に招いて直接子どもの教育に関与してもらう、という考え方が明瞭な形で提起されたのは、それほど古くはなく、1977年に発表されたComing to Our Sensesにおいてである。これはアメリカにおける美術教育に関する大掛かりなプロジェクトの報告書であるが、この報告書の勧告(recommendations) の一つに「芸術家を学校へ計画」が記述されているのである。教育の地方分権化が徹底しているアメリカにおいては、こうした「芸術家を学校へ計画」が勧告されても、すぐに全国各地で一斉に実施されるという状況が生まれることはあり得ないが、その後の経緯をみると、こうした考え方に共鳴する地域も少なくなく、この勧告の精神を様々な形で実践に移していったようである。

芸術家が授業に直接参加するということは、たとえば、インド舞踊に興味を示す子どもたちにインド舞踊の専門家が直接教えるということであり、こうした取り組みによって、子どもたちの技能が短期間の内に著しく伸長することは否定しようがないだろう。また、陶芸家が自ら制作した実物の作品を子どもたちに見せながら創作の生みの苦しみと喜びとを語るとすれば、子どもたちは、今までに感じたことのないような感動を味わえると同時に焼き物に対する深い関心を抱けるようになることは想像するまでもないだろう。

しかし、「芸術家を学校へ計画」にも問題がないわけではない。学校の授業に参加する芸術家が、こうした計画における自らの役割と学校の教師の役割、子どもたちの興味や関心あるいは能力について無関心である場合などには、「芸術家を学校へ計画」はむしろ弊害が目立つものとなる。この種の問題については、アメリカの美術教育を学んだレイチェル・メイソン (Rachel Mason) が、イギリスで実施した大規

1) 鳥栖市立鳥栖小学校教諭（実践研究時は佐賀大学文化教育学部附属小学校教諭）
2) 佐賀大学大学院教育学研究科（院生）　3) 佐賀大学文化教育学部

模の「芸術家を学校へ計画」を総括した論文の中ですでに明確に示しているところでもある。

本グループの研究は、アメリカの多種多様な実践例や、メイソンのような大掛かりのプロジェクトをそっくりまねようとするものではない。むしろ、本研究のねらいは、わが国の各地の学校において、造形芸術学習の多様化と深化に有効と思われる、比較的容易に取り組めるような芸術家参加型の授業をどう創出するかということである。また、そうした授業の計画、実践に伴ってどのような問題が発生するのか、さらにそれに対する対応をどうするかということを、数次にわたって解き明かそうとするものであり、本稿で検討される内容はその第一次に属するものである。

1．第一次計画の概要

本稿は、小学校高学年における染色作品の鑑賞学習を作家が参加する形態で授業を実践したことを中心に扱っているが、実際の授業プロセスでは、この授業の前後に同じく作家が参加する染色の制作の学習も行っている。しかし、制作該当部分については他の論文においてすでに詳しく報告しているため、ここでは省略することにする。鑑賞部分についての計画の概要は以下のとおりである。

（1）日時：平成14年１月22日４校時
（2）児童：小学校５年生１クラス41名
（3）場所：佐賀大学附属小学校図画工作室
（4）内容：染色作家２名が参加。鑑賞作品は各染色家の実物作品２点他
（5）方法：フェルドマンの批評学習を柔軟に適用する。
（6）形態：基本的にT・T方式とするが柔軟性をもたせる。

この鑑賞学習の特徴は、一つは、鑑賞対象となる作品の制作者自身が学習に参加する授業形態を取ったことである。もう一つは、染色による作品を教材として取り上げたことである。染色に教材を求めたのは、防染技法を得て絵画的表現が可能になった染色を、鑑賞の対象にすることにより、「着色」することから生まれ、多くは、日常の中で発展してきた染色から、あらためて、平面に形を創り出す、線と色について問うこと、また、造形活動が、身近な生活の中にあることについて考察する際に、好都合の教材と考えたことによる。

小学校の造形教育においては、児童の生活と関わりのある教材を提示したほうが、より児童の興味関心を引き、その教育効果が期待出来ると考える。現代のほとんどの子どもたちは、誕生と同時に衣と関わりを持ち、それをまとい生活している。染色は、原初的な着色本能に因を成すものであり、そして、呪術的な意味も含めて、主に、衣に着色する行為として発展し、今日では生活のいろいろな場面で、それを見ることが出来る。この衣服を中心とした日常の中にある染色を教材として取り上げることは、身近な教材と言うことと共に、生活と造形活動の関わりを考える契機にもなり得るであろうと考える。そして、染色による形態の表現の仕方を提示することにより、「着色すること」「描くこと」の意味を問い、平面造形における表現手段に対する視野の拡がりを援助することにもなろう。さらに、これら着色剤への興味は、科学性への繋がりをも期待出来ると考える。

また、鑑賞の方法としては、フェルドマン（Edmund Burke Feldman）の批評学習を参照しているが、ここでは柔軟に扱うことにした。フェルドマンの批評学習は記述・分析・解釈・評価の四つの段階を踏むが、各段階のおおよその内容は次のとおりである。

・記述：文章記述に限っているわけではない。普通、口頭で作品に表現されているさまざまなものを客観的に見て取る活動であり、ほとんどの子どもが熱心な参加者となり得る。
・分析：色、形、線、構成など、造形的特徴について見て取る活動である。
・解釈：前二つによる造形情報を参照しながら作家の意図、作品のテーマ等を自分なりに解釈する。多数意見をまとめることは目的ではない。
・評価：作品の歴史的評価や、作者内での位置付けなどの場合は、高度になり過ぎるが、好き・嫌い、いい・悪いといった個々人の判断を示すことを含む。フェルドマン自身、この段階は省略することがあっても良いとしている。

この方法は、やや機械的な印象を受けるが、美術に馴染みのない教師であっても、実質的な鑑賞学習ができるように考案されたものであることは理解しておきたい。実際に、この方法は世界各地で参照されている。教師の姿勢は受容的であることを基本とし、子どもたちが自ら探究的に作品の質を見て取る鑑賞学習を指向する。ただし、今回の鑑賞活動は、第一印象で全体感を把握すること、記述、分析、解釈を分けずに一体的にとらえて総合的に見て取る活動とすること、評価の段階は評価の代わりに子どもの学んだことなどを整理すること、感想を書くこと、の三段階の形で実施することにした。

2．対象児童の実態

この学校は徒歩圏内に県立美術館があったり、隣接する公園に当県出身の彫刻家の作品群が随所に設置されているなど、美術鑑賞の環境としては恵まれている。また、この学校では以前から鑑賞学習に力を入れており、表現学習の部分に鑑賞学習を取り込む形態でなく、独立した鑑賞学習の時間を経験した児童も多い。特に、今回の授業実践の対象となった児童は、鑑賞学習教材の開発に関心を寄せていた担任教師の実践によって、すでに自然物や環境造形物の鑑賞に始まり、ピカソの「泣く女」、ゴッホの「タンギー爺さん」、水墨画などの鑑賞経験をもっている。同年齢層の小学生と比較すると造形芸術の鑑賞経験が豊富といえる。

染色については、これまで制作、鑑賞双方とも全員経験は皆無に近いが、鑑賞に先立って前時に草木染の経験をしている。

鑑賞方法としては既述のフェルドマンの批評学習や、筆者らによるその修正版などもすでに経験している。また、一般には、子どもたちが造形作品に探究的にアプローチするのは無理で、教師が一方的に解説する形態の鑑賞学習とするしかないような印象が抱かれているが、子どもたちの発言は他の教科、領域の学習場面と比較してもかなり活発である。

3．作家参加形態の鑑賞学習の実際

（1）授業のテーマ
「染色の良さを見つけよう」（ホワイトボード上に掲示）
（2）指導
担任教師　伊藤　進（佐賀大学附属小学校教官）
特別講師　田中嘉生（佐賀大学教授）
特別講師　澤田達雄（佐賀大学大学院生）

（3）鑑賞作品

① 「紺地花鳥文夾纈」（夾纈染）、正倉院蔵、復元作品（図１参照）

② 「明けゆく」（ろうけつ染）、澤田達雄作　1998年（図２参照）

③ 「ある日の木」（型染）、田中嘉生作　1997年（図３参照）

（4）鑑賞活動の流れ

① 第一印象をつかむ。

② 総合的鑑賞をする（記述・分析・解釈の段階を一体的に扱う）。

③ わかったこと、感想をまとめる（評価の段階の代わりに行う）。

図1　「紺地花鳥文夾纈」復元

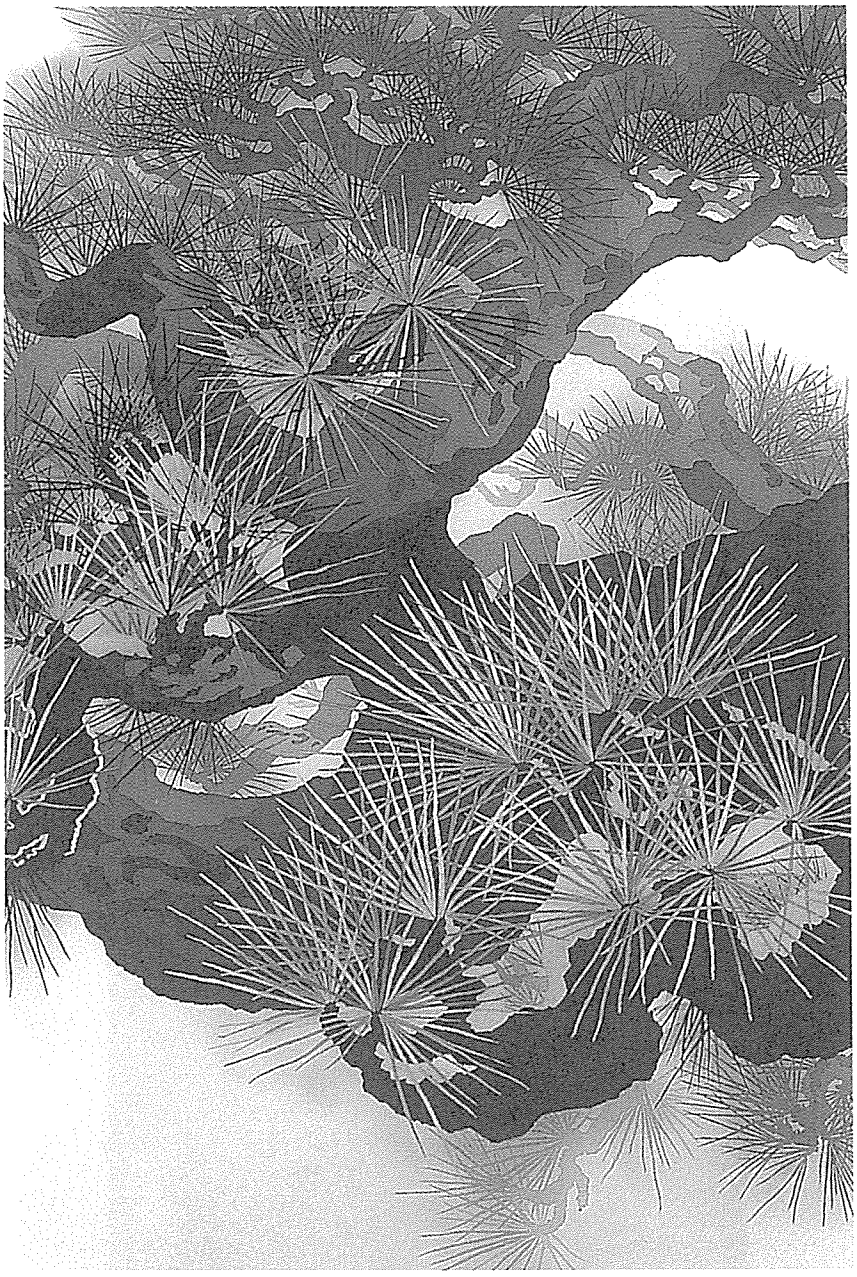

図2「明けゆく」澤田達雄　作

図3「ある日の木」田中嘉生　作

（5）鑑賞学習の全記録

以下は鑑賞活動のビデオによる全記録の音声部分の再現であるが、担任教師は、子どもたちの発言を受けとめ、発言の種類ごとに分けて、逐一ホワイトボードに記述していった。子どもたちはホワイトボードの記述も参考にしながら、発言を重ねていった。

発言者	展開と発言内容の記録
学級委員	これから３時間目の勉強をはじめます。
児童全員	お願いします。
伊藤T	この前は、草木染ということで、澤田先生に来てもらいました。みなさん聞きたいことがたくさんあったみたいで、ひとりひとりの感想に返事を書いてもらいました。有難うございました。では、よろしくお願いします。
澤田I	みなさん、おはようございます。先週は、みなさんに草木染で、絞りのハンカチを染めてもらいました。いろいろたくさんの感想文を読ませていただき、とてもうれしく思います。 私は染色を長年やって来て、染色がとても好きなので、みなさんにも是非染色の体験をしていただきたいのです。なかには思ったより薄く染まったり、絞りの模様がうまくできなかったりしたお友達もあったかもしれませんが、草木染は、なかなかインスタント食品のように簡単にはいきません。何回も繰り替えし染めて良い色が出てくるものです。でも、薄くても、みなさん、何か良い色だなと感じてもらえたのではないでしょうか。 タマネギを選んだ人はなかったですが、食卓に普通にある食べ物、花、草木を使って、これからは、梅とか桜とかが咲きますが、そう言う樹木からも色が出ます。特に、梅は白い梅、紅い梅がありますが、やっぱり、花の色と同じで、木の枝を使っても、花の色によって色が違います。 そして、一番大切なこと、媒染をするということを、みなさんに知ってもらったと思います。草木染は媒染をして、布と仲良くなって染まるんだよと言うのが、分かっていただけたのではないでしょうか。 色々な気付きを感想文で寄せていただき、私は本当にびっくりしています。思った以上にたくさんのことを発見していただきました。 今日は、伊藤先生と、みなさんと、一緒に染色の作品を見ていきましょう。 まずここに一つありますね。あとから、私の作品と、田中先生の作品を見てもらいます。 よろしいでしょうか。それでは、伊藤先生お願いします。
伊藤T	今日は染め物の作品です。この間は水墨画のお勉強もしたけれど、今日は本物の作品を使います。私も、事前に写真とかで見せて貰っていたのと違い、実物を見たらうわあと思いました。染め物ってこんなものなのかと言うことをみなさんに知ってほしいと思っています。 今日はみんなに、見て、考えてもらうのだけれども、実際に作った人がいらっしゃる。そんなことって、なかなかないよね。みなさん美術館とか行ったら本物の作品は見られるけど、作者から解説はしてもらえないよね。 それでは、染色の良さをみなさんに見つけてもらいましょう。 最初にここにある作品「正倉院御物復元」を、パッと見た感じ、どんなことを思いますか。

児童発言１	周りが黒で、なかが赤とか黄色とかハデな色なので、明るいところが引き立っている。
伊藤T	なるほど、周りが黒いから色が引き立っていると思うんだよね。色のことですね。
児童発言２	右と左の模様が全くおんなじで鏡みたい。
伊藤T	なるほど。ちょうどまん中で、左右が同じになっているね。
児童発言３	模様が描かれているまわりに、多分色が移らないようにだと思うけど、白く縁取りしてある。
伊藤T	なかなか遠くからは見にくいかもしれないけど、このあたりは、はっきりわかるよね。(作品を指差す)
児童発言４	周りの模様を、少なく描いて、一番中心がきれいに引き立つようにしている。
伊藤T	なるほどね。このあたり、中心が描きたかったんじゃないかと言う意見だね。 他には、ありますか。
児童発言５	そのまん中のところが、すごく細かい。
伊藤T	なるほどね。中心がやっぱり大事かな。じゃあ、最後に誰か言ってくれるかな。
児童発言６	周りが暗くて、中心が明るくて、花や鳥がいるから、メリハリがついている。
伊藤T	周りが暗い色だから、メリハリがあってきれいなんだと言う意見が多かったね。じゃあ、澤田先生にちょっと聞いてみよう。
澤田I	みなさん、たくさん意見を言っていただきました。 これはですね、実は、千三百年前の作品です。日本では初めて模様を染めるようになった頃です。最初は布に一色、色を染めるだけだったのが、色々な模様を染めることができるようになりました。そんな模様染めの現存する一番古いものです。みなさんは、千三百年前というと、どう言う時代かわかりますか。 奈良に都があった時代です。この作品は奈良の正倉院のものです。正倉院は、東大寺という奈良の大仏があるお寺にあります。 これは（目の前の作品)、残念ながら本物ではありません。京都の染色や木工の作家が復元したものです。なぜ、木工も関係があるかと言いますと、みなさんはこの前割り箸で挟んで模様を染め出しましたね。あの原理です。 木の板を二枚重ねて、その間に布を挟んでいます。だれか、左右が同じと言われましたがその通りです。布をまん中で二つ折りにして、板に挟んで染めています。 みなさんは版画、木版画をしたことありますか。この場合は、上下同じ形に彫ったところに色が入り彫り残したところ、誰か、白い縁取りがあると言われましたね。上下の板と板が隙間なく噛み合ったところが白く残ります。 これは、夾纈染（きょうけち）という大変珍しい技法で、現代この染め方をしている人はほとんどありません。だいたい、日本で発明されたものではなくて、インド、チベット、ペルシャ、エジプトあたりにも原形があります。 模様もそのような伝統的なデザインが使われていますが、この作品は、日

澤田I	本で作ったものです。ですから、日本の風土が関係しています。この復元のお話も面白いことがあるのですが、時間が足りません。次の機会にして、この本物は、保存のため正倉院展に十年に一回ぐらいしか出て来ません。ですから、学者が復元したものもありますが、このように作家が復元したもののほうが、より本物に近いものになっています。(本物の写真を見せる) では、次に、私の作品を見ていただきたいと思います。よろしく。
伊藤T	ありがとうございました。染め物は日本でも、昔からずっと続いているんだね。そして、現代の澤田先生が染め物を作っていて、今度はそれを見せてもらいましょう。千三百年前に作った人に話を聞く訳にはいかないけど、今も一生懸命に作っている人がいて、いかに染色が魅力的なものかが解りますよね。 それでは実際の澤田先生の作品を見て、いいところとかをみんなで見つけて、そして、先生に解説をしてもらおうと思います。 プリントを配ります。(作品鑑賞用のワークシート) 今日は、ちょっといつもと違って、こんなふうに進めてみたいと思います。 じゃあ、第一印象からいってみましょう。 この作品を見て、どう思いますか。
児童発言7	はい。グラデーションがあってすごくきれい。
伊藤T	なるほどね。どんなことでもいいですよ。誰か。
児童発言8	立体的ですごくきれい。
伊藤T	どのあたりが立体的と思うの。
児童発言9	例えば、枝や葉が重なっているところ。
児童発言10(A)	手前の光があたっているところがはっきりしていて、奥にいくと色が薄くなっている。
児童発言11	私は、薄いとこが、川かなにかに写っているところじゃないかと思います。
児童発言12	木の影がはっきりしている。
児童発言13(B)	木を下から見上げたような感じがする。
児童発言14	A君に付け加えて、遠くのほうがぼやけているといったけどなんか、霧がかかっているのじゃないでしょうか。
児童発言15	B君は下から見たといったけど、私は上から見てるんじゃないかと思います。
伊藤T	もしよかったら、少し、解説して説明してくれる。
児童発言15	そこの右上の方に一番ハッキリしている枝があるので、中間、下の方へと視点が続いているのじゃないでしょうか。
伊藤T	他にはありますか。
児童発言16	周りがとても明るくて、木がハッキリと見える。
伊藤T	はい。それでは、まだあると思いますが、今日はこんなふうにして見ましょう。いつもは、色の工夫とか、形の工夫とか、分けて見つけていましたが、今日はいきなり、澤田先生がどういう気持で作られたのかという主題、この作品で何を表したかったのかという主題を予想してもらいたい。そして、主題を表すために、こんな色にしている、こんな形にしているんじゃないかというところを、考えてほしいと思います。 まず、木ということはわかるよね。じゃあ、みなさん。少し時間をあげますから、近くで見るなりして考えて見てください。

伊藤T	（ほとんどの児童が作品に近寄り、見つめる） 前の人は少しかがんで見てね。
澤田I	少し触ってみてもいいよ。美術館では、普通は触れないけれどね。 （みんなが、喜んで触ってみる）
伊藤T	こんなことが描きたいなという気持があって、澤田先生が、わざわざ時間をかけて作っておられると思うので、それをみんなで予測してもらうと、喜ばれるんじゃないかな。 はい。じゃあ、座って下さい。 誰か、こんな気持を表したかったんじゃないかなと思うところのある人、手をあげて下さい。
児童発言17	夜が明けて、朝になるところを表したかったんじゃないかな。
児童発言18	朝早くのきれいな光を表したかった。
児童発言19	朝日があたってとてもきれいなところ。
児童発言20	木がものすごく高いから、影がこんなふうに薄いんじゃないかと思う。
児童発言21	さっきは、木の上の方から見てるといったけど、一番太い木の奥の方を見ると、木が川に写っているんじゃないかなと思う。
伊藤T	ただ木の様子だけじゃなくて、木が水に写っているということですね。
児童発言22	中心のところに日があたっていて、色がきれいで周辺のところは暗くなっていたり薄くなっていたりしている。
伊藤T	今みたいに、このあたりがこうだからどうだとか、言っていくとみんなが分かりやすくていいよね。
児童発言23(C)	左下のほうが、黄色っぽいので、
伊藤T	うん、どこかな、前に出て来て、説明してくれる。
児童発言23	（前に出る）だんだん太陽がのぼっていって、木の後ろから光が差し込んでいく様子を表したかった。
伊藤T	この下の黄色っぽくなっているところに、太陽がのぼって来たんじゃないかということね。
児童発言24	C君に付け加えて、他は青とか水色の葉だけど、中心のところは黄色と緑色なので、このあたりのところから太陽が登ってるのじゃないかな。
伊藤T	うん。（指差して）このあたりとこのあたりの葉の色が違うね。きっと、下から、明るいものが上がって来ているんじゃないかと思うんだね。 葉っぱどうしをいろいろ比べてみても、様子が解るということね。
児童発言25	私は、普通は、川とかは水色だけど、朝日が映り込んで、黄色い色になっているのではないかと思います。
伊藤T	みんな、朝日が登っていくところという意見が多いよね。 じゃあ、澤田先生のお話を聞いてみようね。
澤田I	みなさん。ありがとうございます。この作品の題名は「明けゆく」です。 たくさんの方が言ってもらったように、朝の情景です。 私は朝が大好きなので、朝の空気をいちばん最初に表現してみたいと思いました。そのなかで、朝の光、靄がかかった様子とか、さわやかで気持ちのいい、そういう世界を表そうとしました。自然を通して、豊かさとか命とか、自然の生命感ですね。この場合は、松がテーマですが木の生命感も一緒に表現したかったのです。

澤田I	作品と言うのは、必ず作者の思いがあると思いますけれども、それが、見て下さる人に伝わったり、伝わらなかったりします。伝わらない部分があっても良いのかなと思います。逆に、みなさんが私の思いと全然違う思いで見て下さっても、作品は十分成立するんだろうと思います。ちょっと難しくなりましたか。 自然をテーマにして、朝の情景を表現しました。 私は、染色の透明感のある色が好きなのですが、見ていただくと、絵の具と違って、私が使う染料には透明感があります。 ほとんどの人が、触ってくれましたけど、布に絵の具だと、表面がごわごわしますね。これは、パネルにはって、一見、絵の様ですが、はずして、洋服にすることができます。Tシャツにすることだってできます。 これが染め物の楽しさだと思います。 ありがとうございました。
伊藤T	色をこのあたりとこのあたりで変えたのは、意識的に澤田先生変えてるよね。そんな気持ちとか、変化にみんなが気付いてくれたので、澤田先生は喜ばれたと思います。 ではもうひとり、せっかく来ていただいていますので、田中先生、良かっら前の方にお願いします。 (田中作品登場) はい。ぱっとみて、どんな感じ。
児童発言26	木の下に人が腰掛けてる。
児童発言27	夕日が沈んでいくんじゃないでしょうか。
児童発言28	人と犬がいる。
伊藤T	犬。どこにいるの。
児童発言28	そこの、人の足のところです。
伊藤T	どのあたりですか。指差してみて。
児童発言28	このあたり。(指し示す)
児童発言29	(人が) 下向いて考え込んでいる。
児童発言30	全体的に黒っぽい。
伊藤T	いくつか、主題のようなものが見つかったかな。
児童発言31	木が一本。
伊藤T	(笑い) そうだね。よくきがつきました。(全員笑い)
児童発言32	木の形がなんか原爆みたい。
児童発言33	森のなかにいるみたい。
伊藤T	はい。じゃあ、田中先生はいろいろみんなが見つけてくれたら、喜ばれると思うので、三分ぐらいしか時間がないけど作品をよく見て、(ワークシートに) 書いてみて下さい。 (みんなが作品に近付き触ってみたりする)
伊藤T	はい。じゃあ、席について下さい。時間がありませんので座って前を向いて下さい。 田中先生はどんな気持ちで作ったと思いますか。
児童発言34	寂しい感じかな。色が暗いし、(人の) 目が光ってる。
児童発言35	原爆が落ちたんじゃないかな。ひとり残された人。
伊藤T	どうしてそう思う。

児童発言35	暗い色を使っているから。
伊藤T	そうだね。じゃあ、時間ないから、みんな、パッパッと答えてね。
児童発言36	曇り空とか描いてあるので、悲しい気持ちを表している。
児童発言37	空に天井がある。
児童発言38	ひとりぼっちの人の気持ちを表したかった。
児童発言39	木が高くて、人が小さいから、やっぱりひとりぼっちの気持ちかな。
伊藤T	他には。
児童発言40	そばに、鳥とかがいなくて一人だけなので、淋しい感じがする。
児童発言41	周りに何もなくて、暗い感じがある。
児童発言42	(人の) 目が下のほうを向いているから、泣いているように思う。
伊藤T	じゃあ、今出ているのは、木が高くてこーんなにでかいのに (大きいそぶり) 人が小さいから、大きい木と小さい人でさびしさをあらわしているんじゃないかとか、目が下向いてるからさびしさが出てるんじゃないかとか、それから、周りに鳥とか何かがあれば、水墨画の時もそうだったけど、周りにいっぱい何かがあれば賑やかな感じだけど、何もないと。だから、ひとりぼっちのさびしさを表しているんじゃないかという意見だね。 他にありますか。
児童発言43	きっとここにいるのは (木も人も) 同じ生き物だから、さっき澤田先生が木の生命力とか言ってたから、田中先生も木の生命力や人の命など、生き物の生命を表したかったんじゃないでしょうか。
児童発言44	僕もそう思う。人も木もみんないっしょに生きている。 澤田先生の作品に比べて、田中先生の作品は暗いから、原爆の恐さを表しているのかな。
伊藤T	はい。みなさんの意見を聞いていると、非常にさびしいと言う意見と、逆に、生命力とか生きていると言う感覚の、その二つに別れると思うけど、みなさんは、それぞれ見方が変わって良いと、さっき澤田先生が教えて下さったけれど、みなさんはどっちだとおもいますか。 さびしさを表しているんじやないかと思う人手をあげて、(ほとんど多数が手をあげる) じゃあ、生命力の方だと思う人、(数名手をあげる) この二つでもし、意見が少しあったら聞いてから、田中先生のお話を聞こうね。 どちらかで意見のある人。
児童発言45 (D)	生命力みたいなものを表したかったと思うのですけど、周りは黄色っぽくて、まん中に木がドーンとあるので、強くて大きい感じを表したかったと思います。
伊藤T	周りが薄くて、木が濃くて、しっかり見えるから力強いと言うことね。
児童発言47(E)	はい。僕はそれには、反対です。木の幹が細いからさびしい感じがします。
伊藤T	D君は黒いから強いと言ったけど、E君は細いからそうじゃないというわけね。 いいですよ。そうやってお互いに意見を言っていくと、みんなの見方も広がっていくからね。
児童発言48	木が細く、木が上にいく程だんだんと細くなって、手でこう押したら折れそうな感じがする。
伊藤T	ぐっと押したら倒れそうに思うのね。じゃあ、あと一人二人聞いてみよう。

児童発言49	ほんとは、田中先生は、鳥とか動物とかもっと入れたかったんじゃないかと思います。
児童発言50	私は、両方だと思います。さびしくて、かなしいから、か細い生命力じゃないかと思います。
児童発言51	力強さだと、もうちょっと明るい色とか、赤っぽい色が入るんじゃないでしょうか。黄色いけど、黄土っぽい黄色なので、力強さじゃないと思います。
伊藤T	なるほどねえ。じゃあ、田中先生によーく聞いてみよう。
田中I	田中です。ひじょうに、照れております。いろいろ言って下さって、かえって、私のほうが参考になった次第です。 これは、題名は「ある日の木」と言います。 いつか、熊本に用がありまして、JRでいく途中に、雪がふって来て、平野のなかに一本の木だけが、すっと立っている情景が見えたんです。それが、ずっと頭のなかにありまして、その木の印象を思っていたんですが、それで、この絵自体は、実際のこの場所があって人がいて、その場所をスケッチして描いた訳ではありません。 こころのなかの風景だと思って下さい。 それで、すこし時間が経ってから、気になっていたその木の印象をテーマとしました。 ですから、その時の木は雪が積もっていた訳です。 みなさん、木が長過ぎる。細いと言われましたが、確かにそう思います。こんな木はないですが、もう自分で勝手に作っております。 もう一つは、このデザインのテーマは、先ほど澤田先生から説明がありましたが、正倉院の夾纈染ですね。この時代のデザインは、これも木があって下の方に鳥がいるんですけど、これは西アジアの方から伝わって来たデザインのテーマです。それで、私もこれを作る時にちょうど頭に思い浮かべまして、そのテーマというのは、まん中の木というのは、聖樹なんですね。聖なる木のふもとにいる動物とかは神様に近付くと言うデザインのテーマがあるんですね。それを頭に浮かべて作りました。 実際、木の下に、こういう女性が座っておるわけ無いんですけど、女性を座らせて、聖なる木の下にいると神に近付くといつたことを考えて作りました。 見た時、さびしい気持ちの人がこれを見ると、どんどんさびしくなると思います。それから、少し幸せな人が見ると、もっと幸せになってもらえるんじゃないかと思って作りました。 どうも、ありがとうございました。(児童から大きな拍手)
澤田I	田中先生、ありがとうございました。 次の時間は型染をやります。 技法の話はあまり出ませんでしたが、簡単にいいますと、私のは、ろうけつ染です。ろうを溶かして、布にろうを付けて、染まるところと染まらないところを作って、模様を染めるやり方です。 田中先生のは、型染です。みなさんが、型紙を切って来てくれましたね。同じやり方です。で、この場合は、抜染と言うやり方で、まず真っ黒に染めた布に、色抜きして模様を作る技法です。型染めの基本と逆転してる、反対

	のやり方です。 みなさんにこれからやっていただくのは、ステンシルと言って、型染の一番基本の技法です。 これは、千三百年前の正倉院の染め物のなかにも、このステンシルが使われています。みなさんが最初にやった絞りも、このなかにあります。ろうもあります。一番代表的な三っつの技法をいっぺんに同時に見ていただいたので、頭が混乱するかもしれません。 今日は、田中先生の作品を見せていただいたことを活かして、これから次の時間で、型染の表現学習をみなさんと一緒にしたいと思います。 よろしくお願いします。
伊藤T	千三百年前の作品から、今、現代、両先生が、一生懸命気持ちを込めて作っていらっしゃる、それだけ染色には歴史があって、魅力があって、これからどんどんつなげていきたい夢があって、新しくなっていくだろうと思います。 （田中先生の作品を指して）これもさっき、誰か天井があると言ったけど、ああいうところの形も型紙を利用していることがわかるよね。 じゃあ、今日はみなさんが染色家になったつもりで、作ってもらうことになると思います。 その前に本物の作品を見せてもらって、触れさせてもらったり思いを感じてもらいました。きっと、みなさんもこんなものが作りたいという思いがあって、型紙を作ったので、良い作品ができると、今から楽しみにしています。 それでは、この時間は終わりにしたいと思います。 じゃあ、田中先生にお礼を言いましょう。
児童全員	ありがとうございました。
伊藤T	じゃあ、澤田先生には次の時間も続けてお願いしましょうね。
児童全員	よろしくお願いします。
伊藤T	ワークシートに名前を書いて、班で集めてください。 では、澤田先生、次の授業の説明お願いします。
澤田I	はい。それでは、準備の説明をしましょう。（型染の表現学習が始まる）

鑑賞学習時間５２分３０秒・児童発言の数字は総数（同じ児童の複数発言を含む）

（6）感想文の抜粋

感想文については、紙数の都合もあるため、抜粋を掲載するが最低限ほぼ全体の傾向を示せるようにしたつもりである。以下が感想文の抜粋部分である。

	感想文要約
女子A	最初見て絵だと思ったが、さわってみて布に色がしみ込んだ跡があった。グラデーションがすごくきれいでした。
女子B	「明けゆく」を見て明るいなあと思った。「ある日の木」は、暗いなと思ったけどその意味を聞いて何となく思いが伝わった。
女子C	澤田先生と田中先生の作品は、全然違うけどどちらも気持ちが入っていました。
女子D	ろう染めで工夫すれば、だんだん色を変えることができる。
女子E	「明けゆく」題名がわからなくても朝と言うことが感じられる。「ある日の木」は作者のこ

	ころに残った頭の中に残る物を描いている。
女子F	ちゃんとテーマがあって、そのテーマにあわせて表現方法を変えている。絵より時間もかかるし、染め方もむずかしい。
女子G	色を同系色にまとめている。色による遠近感がある。主役を小さくしたり、ドーンとおおきくしたりしている。
女子H	スプレーでしたみたいなとてもきれいなグラデーションでとてもびっくりした。
女子I	「明けゆく」を見て自然の生命力が伝わって来た。「ある日の木」はさみしいような感じで色も少し暗いけど、木と人間の大きさがとても違ってすごくいい作品だと思った。
男子J	型紙を細かく切っていくとあんなすごいことができるのですね。「ある日の木」は、木の草一本一本切っていると思うと目がくらくらしそうです。
男子K	作品の布をさわりくらべてみたら、感触が違った。澤田先生の作品はとても細かくてきれいだった。田中先生の作品は影だけなのに木に寄りかかっている人の気持ちまで分かった。
男子L	「明けゆく」は、とっても明るくてすがすがしい気持ちになった。「ある日の木」は、さみしいような感じになるちょっと暗い作品でした。さわって見て布に染めてあることがわかった。
男子M	さわって見て、「あっ、本当に布だ」と思った。こんな物が作れるなんてすごい。
男子N	「明けゆく」は日光が差し込んで来て輝いていた。見ただけで口を開けてしまうくらいに、上手にできていた。「ある日の木」は、気持ちがつまっていた。悲しい人にはもっと悲しくさせ、うれしい人にはもっとうれしくさせるような木だった。だから、輝いて、気持ちがこもっているのがいい作品だと思った。
男子O	「明けゆく」はとても遠近感があった。「ある日の木」は、木の下で女の人が本を読んでいるように見えた。
男子P	田中先生の「ある日の木」は神様に近付くなら、なぜ明るい色にしなかったのかなあと思った。 「明けゆく」は下の方が明るく上にいく程色が濃くなってきていた。
男子Q	最初見た時は染め物ではなく、絵だと思った。さわると布だったからびっくりした。
男子R	細いペンとか使わないであんなにうまくできること。染め物にもいろいろな方法があること。
男子S	どうしたらこんな上手にできるのかな。色の良さがわかりました。
男子T	「明けゆく」は朝の光と影がはっきりしていた。一本一本松の葉が書いてあった。田中先生のは色が黒っぽくて良くあんな色があるなあと思いました。
男子U	近くで見ると布目がよく分かった。布の違いにも気付いた。
男子V	「明けゆく」とてもきれいで明るくて朝の感じがした。「ある日の木」木の下に座る女の人が神に近付くと言う説明を聞いてよく分かった。
男子W	「明けゆく」は、青い明るいきれいな作品。「ある日の木」は暗くてとてもさみしい作品でした。
男子X	草木染をして、染め物はあまりきれいじゃないと思っていたが、澤田先生の作品を見てとてもきれいだと思った。田中先生の作品は型紙で形ができていると聞いてびっくりした。
男子Y	「明けゆく」は、最初筆で書いたのかとおもったが、染めてあったのですごいと思った。「ある日の木」は、空に地上があったり、下の方に花があってとてもすごかったです。
男子Z	「明けゆく」は、とてもリアルですごい。ぼかし方も知りたい。「ある日の木」は、神に近付くし少女。木もだんだん神様に見えて来た。なぜ地が天になっていたのか知りたい。
男子a	「明けゆく」は、色の変化、日の当たる様子がよく分かってきれいでした。「ある日の木」

	は、たった二色でも伝えたいことがよく分かり、悲しさの表現を感じた。
男子b	「明けゆく」は、こころに思ったことを染色していると思いました。「ある日の木」は、さみしさや悲しさをあらわしていると思ったけど、熊本に行った時にこころに残った木と聞いてびっくりした。
女子c	今まで鑑賞したのは、えんぴつやクレパスみたいなのを使っていたけど、全然見た感じが違って本当に染めてつくってあって、すごく難しいだろうなと思いました。染め物はいろいろな物に応用できるんだと思いました。
女子d	「明けゆく」は、まるで絵の具で書いたみたいですごかった。作るの大変だろうな。
女子e	感動した。「こんな物ができるのか」と思った。どうやって、こんな染色に先生達は出会ったのですか。教えて下さい。楽しい。
女子f	「明けゆく」は、色の区別がはっきりしてとてもいい絵だと思いました。「ある日の木」は、私達の気持ちと、先生の気持ちが違ったのでびっくりした。やっぱりプロだなあと思った。今度はゆっくり見たいなと思いました。

4．考察

（1）児童の鑑賞内容

今回の鑑賞活動は、担任教師伊藤の「今日はみんなに、（染色作品を）見て、考えてもらうのだけれども、実際に作った人がいらっしゃる。そんなことって、なかなかないよね。みなさん美術館とか行ったら本物の作品は見られるけど、作者から解説はしてもらえないよね。それでは、染色の良さをみなさんに見つけてもらいましょう。」という発言から始まったが、子どもたちは作品を制作した作家が二人も教室に来てくれた、ということに興味津々の様子を見せていた。

今回取り上げた三つの作品は、いずれも木をモティーフとして取り扱ったものである。このことは、複数の作品を同時に鑑賞する上において、異なったモティーフによって起こり得る、児童のイメージの混乱を避ける意味では、効果があったと考える。また、同じ木がデザインの中心部を占めていたとしても、それぞれの木の表現する「もの」は相互に違うということに気付ける利点がある。さらに、それぞれ、防染技法が異なることも、染色における形態の現出方法が「描く」ことと、立場を異にすることの理解の一助になったことも、以下に示すように子どもたちの発言によって明らかである。

まず、①の正倉院裂の復元作品「紺地花鳥文夾纈」（夾纈染）であるが、児童は左右対称のデザインになっていることに注目し、白い輪郭線にわずかな滲みがあることなどにも気付いたが、あまりに文様性が強いために、それほど興味ある発言は聞くことが出来なかった。そこで、「第一印象」の後に、澤田が技法とデザインの由来について説明を加えた。このことによって、先に児童が気付いたことがらが、夾纈技法から生まれる特徴の一つであることが理解しやすくなったし、西方から伝わったデザインをテーマとしていること等の話しから、染色技法による模様の作り方や、染色の歴史的背景に興味をもたせることにもつながったと思う。澤田の言う「学者が復元したものもありますが、このように作家が復元したもののほうが、より本物に近いものになっています。」は作家ならではの言葉であり、制作者ならではの説得力のある説明である。

②の「明けゆく」（ろうけつ染）澤田達雄作と、③の「ある日の木」（型染）、田中嘉生作の作品については、多くの児童が作品に近付き、手で触りたいという素振りを見せたので、澤田が、「さわってごらん」と声掛けをした。この「さわった」ことによって、「最初見て絵だと思ったが、さわってみて布に色がし

み込んだ跡があった」（女子Ａ）や、「さわって見て布に染めてあることがわかった」（男子Ｌ）のように、子どもたちは染まっていることを感覚的に理解することになり、「今まで鑑賞したのは、えんぴつやクレパス見たいなのを使っていたけど、全然見た感じが違って本当に染めてつくってあって、すごく難しいだろうな」という感想へと繋がったことがわかる。

こうしたことは通常鑑賞学習に用いられる写真による複製品では感じ取ることはほとんど不可能である。子どもに本物の鑑賞を経験させるには本物の作品を用いることがベストなのである。

下の表１と２は、澤田作品と田中作品について子どもたちが鑑賞活動のなかで見せた発言や感想文に見られる内容を整理して示したものである。布の質感への言及が多いのは。子どもたちの感想にしばしば触れられているように、布を染めることで、複雑な模様や絵柄ができることに驚き、新鮮な感動を覚えたことによる。作者の意図した作品全体の印象を子どもたちはほぼ感じ取ることができたようである。また、子どもたちの目は、染色作品は、人間の豊かな感情や思考をも表し得るということにも向けられている。

作品の主題に関しては、澤田作品よりも、田中作品の方がかなり理解することが難しかったようである。しかし、小学生であれば、田中作品の中に静かさや木のもつ不思議な生命感などがつかめれば十分ではないだろうか。この作品のもつ深い精神性を見て取れるのは青年期以降であろう。全体的に見て子どもたちは十分満足できる鑑賞活動を行ったと言える。

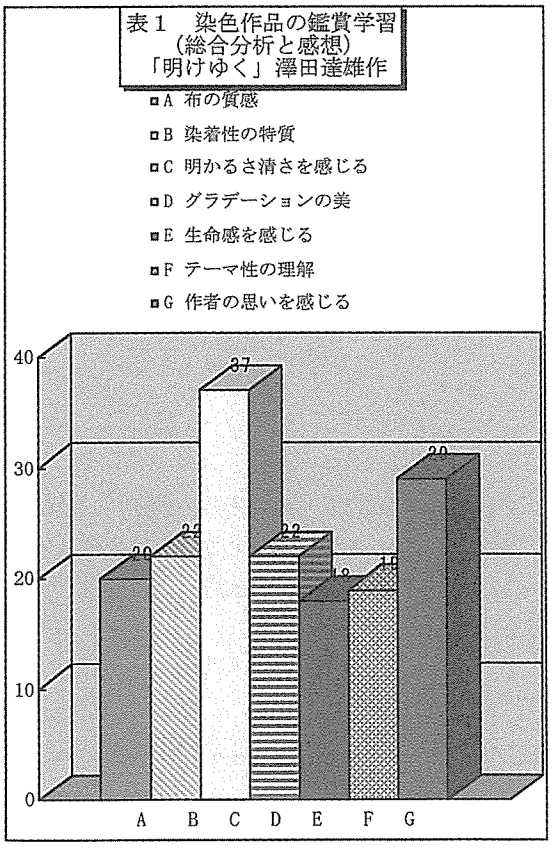

表１　染色作品の鑑賞学習
「明けゆく」澤田達雄作

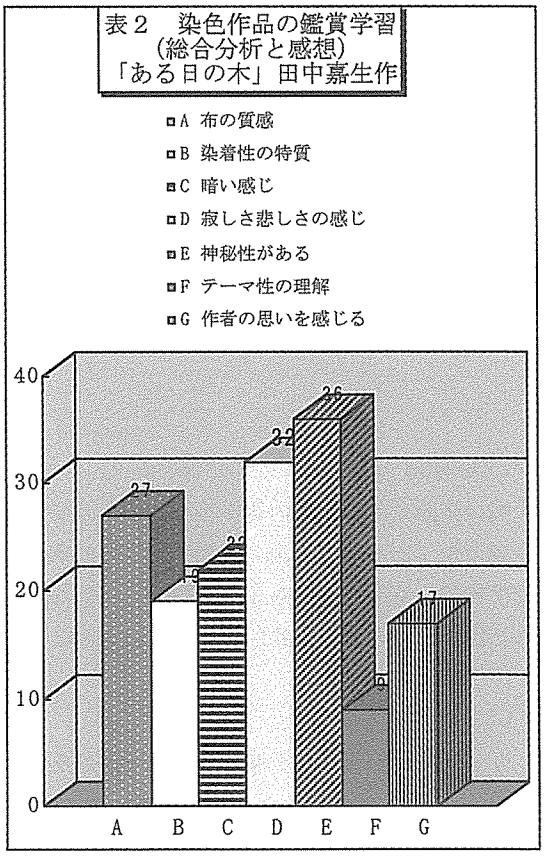

表２　染色作品の鑑賞学習
「ある日の木」田中嘉生作

もちろん、その背景には、実物の作品が用意されたこと、作者自身が授業に参加したことがあることは言うまでもない。用意した作品は、このクラスの児童にとっては妥当な水準であったと思う。

大学の附属小学校であるから、これだけ活発な発言や、鑑賞の深まりが見られるのだろうという意見があるかもしれない。しかし、以前、フェルドマンの批評学習の実践的検証のために、ピカソの「ゲルニカ」（複製）を用いた全く同じ指導案による鑑賞学習を、附属小学校と、同一市内の公立小学校で実施したことがあるが発言回数、発言内容等はほとんど差異がなかったことを付記しておきたい。

（2）指導者の働き

外部の特別講師と学校の教師が共同して授業を展開する場合にもさまざまな形態があり得ると思われる。外部講師が主体的に活動する場合もあるだろうし、今回のように学校の教師が主体的に動き、特別講師が担任教師の補完的な働きをする場合もあるだろう。

担任教師の伊藤は力のある優れた教師である。受容的な態度とソフトな口調で、子どもの発言を繰り返したり、確認したりしており、子どもたちがのびのびと発言できるような雰囲気をうまく作り出している。

特別講師の澤田は、いくつもの小学校で似たような経験をしているだけに、子どもたちの目線で、子どもたちができるだけ理解しやすいような言葉を選んで話しているなど、適切な動きをしている。

また、同じく特別講師の田中は、日頃から、子どもの作品に関心をもち、子どもの学習活動にも興味を抱いており、附属学校へもしばしば訪れているため、子どもたちとの接し方に無理はなく自然である。もちろん、両者とも今回の関与はすべてボランティア活動である。今回の企画では最適の人材を得ることができたといえる。感想文によると、澤田や田中の話しを聞くことによって、さらに子どもたちの印象が強められたり、本来の作者のテーマをより深く理解できるようになったことがわかる。

芸術家が参加する授業の正否は招かれる芸術家の性向、態度によってほとんどが決定されるといって良い。できれば、子ども好きで、学校教育に理解をもち、ある程度協調性のある芸術家に参加してもらいたいものである。概して、個性の強い芸術家は、他者のデリケートな心の動きに鈍感であり、無神経な言動で教師や子どもの心を傷つけることがないとは言えない。

どんな地域であっても、学校教育に理解を示す、優れた芸術家はいるし、学校の保護者の中にもそうした人材はいる。校区内の貴重な人的資源を見つけ、協力を要請するのも、今後の学校の課題の一つであろう。

（3）時間

短い時間に活動する内容が多すぎたようである。①の正倉院裂の復元作品「紺地花鳥文夾纈」（夾纈染）を省くか、あるいは計画の段階でもっと時間を多く取るべきであった。この内容のままで実施するとすれば学校時２時間程度がちょうどいいのではないかと思われる。また、もっと時間的余裕があれば子どもたちと作者との対話に発展させることもできたと思う。

（4）鑑賞の方法

今回は鑑賞の方法、手順は、①第一印象をつかむ、②総合的鑑賞をする（記述・分析・解釈の段階を一体的に扱う）、③わかったこと、感想をまとめる（評価の段階の代わりに行う）ということにしたが、実施してみて、②の部分は、記述や分析に相当する部分を一つにまとめて、解釈の部分を独立させといた方が良かったと思う。染色特有の素材や技法的特徴をしっかり踏まえた上で解釈に入った方がいい。フェルドマンの批評学習にこだわる必要はないが、学習する題材によって鑑賞の方法も柔軟に考えていくことが

必要である。

また、②総合的鑑賞をする（記述・分析・解釈の段階を一体的に扱う）と、③わかったこと、感想をまとめる（評価の段階の代わりに行う）の間に、制作者が自作について語るという設定であったが、制作者が学習に参加する場合、どの場面で登場するかは、重要な意味を持つ。つまり、制作者の作品への想い、主題等が語られるが、それは児童の想像力を膨らませることもあるいっぽう、制作者のことばに児童の気持ちが引きずられる危険もはらんでいる。

今回の設定の仕方は、鑑賞の授業の流れとして適当であると思う。制作者がその場にいることによって、児童が制作者と感情を共有できたり、あるいは、まったく制作者の想いとは別の想いを抱く、刺激的な鑑賞の醍醐味を味わうことができたとも思われる。

おわりに

芸術家を学校へ招き、その芸術家の実物の作品を見るという機会をもち、さらに作者自身によって作品に対する思いを語ってもらうということは、きわめて刺激的で新鮮な体験である。また、学校や教師が少しばかりの努力さえ惜しまなければ、こうした形態の授業創出も日本全国どこでも実現可能である。

今回の計画では、三作品を鑑賞学習に提示したことにより、染色の歴史の一端を垣間見せ、「染めること」の古くからの人々の関わりを伝えることができた。また、染色における形態の現出方法から、「着色すること」「描くこと」を問い、着色剤への意識を高めることになったようにも思う。衣服を染めることを主として、発展してきた染色だが、防染技法の展開により絵画的表現が現代では十分に行え、いわゆる、絵画と同じような鑑賞が成立することは、いま見てきた通りである。

しかし、染色は工芸活動の一つでもあることからいって、人間を助ける道具として理解すべきであり、絵画的鑑賞とは異なった鑑賞の構造をもつと考える。絵画的な染色作品は、飾ることで人間生活を精神的に助ける道具である。したがって、道具である以上、そこから、技術とか、材料等を読み取ることが必然的にともなう。つまり、工芸と絵画との成り立ちの違いが鑑賞学習に反映されることになり、造形への一層の理解へと繋がると考える。ここに、染色教材が、鑑賞学習の中で果たせる、大きな役割があるように思う。

また、今後の染色教材の展開として、染色の中心を成してきた衣服を取り上げることも考えられよう。日常が、鑑賞学習に反映出来る教材として期待出来る。ただ、生活と関わるものが、鑑賞学習に取り上げられることは望ましいが、提示する側の力量が、より問題となってくるだろう。ともあれ、このように教材としての広がりを持つ染色工芸は、鑑賞学習の展開の一助に成り得ると、今回の実践から理解することが出来た。加えて、制作者の学習参加は、鑑賞の妙味を増幅させる意味においては、大きな効果があるように考えるが、制作者の意志がどうしても反映することが避けられず、この点を意識した授業展開の工夫も必要である。しかし、この制作者の参加は、作品と鑑賞者が一体となる授業の雰囲気作りには大いに役立ち、ダイナミックな授業展開が行える要素と成り得るように思えた。今後、適切な協力者が、増えることが期待される。

なお、こうした新しい形態の授業を創造するために、大学と附属校との造形教育に関する共同研究会では、染色の制作や鑑賞についてさらなる継続的な試みを計画すると同時に、絵画や、彫刻、窯芸等についても、作家が参加する形態のより質の高い授業作りを続けていくつもりである。

＜参考文献＞

（1）宮脇　理編著、前村晃他著『小学校図画工作科教育の研究』、建帛社、1993年、p.29
（2）上村六郎『色と染　日本人の生活文化史』、毎日新聞社、1980年
（3）佐藤賢司「＜工芸＞の捉えかえしと美術教育の可能性の一考察」、『大学美術教育学会誌』第３号、2000年
（4）松本包夫『上代の染織』、　中央公論社、1982年
（5）山崎青樹『草木染・染料植物図鑑』、美術出版社、1985年
（6）Education and Americans Panel Arts,Coming to Our Senses:The Significance of the Arts for American Education,McGrow Hill Text,1977
（7）Rachel Mason,Contribution of Professional Artists to Arts Educationin Schools,『美術・工芸教育学』第２号、佐賀大学教育学部美術・工芸科、1995年